



特集

Evolution of the English Language

なぜ a apple と
言わない? 🍏

「歴史」を知られば納得!

英語の「あるある」大疑問

「英語史」などといういかめしい表現を聞くと、多くの人が身構えてしまうかもしれません。

しかしちょっとのそいでみれば、この分野は、皆さんが英語に対して抱く素朴な疑問を

スルスルと氷解してくれる、英語学習者の心強い味方だとわかるはずです。

読者の皆さんが、納得しながら、肩の力を抜きつつ学習を進められるよう、

英語の歴史という観点から、英語にまつわるさまざまな疑問や

固定観念を解きほぐしていきましょう。

執筆 堀田 隆一(ほった・りゅういち)

慶應義塾大学文学部教授(英米文学)。英国グラスゴー大学英語学研究科博士課程修了。著書に、『英語の「なぜ?」に答える はじめての英語史』(研究社)、『英語史で解きほぐす英語の誤解 納得して英語を学ぶために』(中央大学出版部)がある。また、英語史に関するさまざまなトピックをわかりやすく解説する「hellog～英語史ブログ」を日々更新中。

▶ <http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/>

はじめに

今や世界で話者人口が20億人ともいわれるリンガ・フランカとしての英語——私たちは、英語ネイティブの人々とだけでなく、むしろ多くの非ネイティブの人々とも英語で交流する機会に出合います。国際的なシーンで主として用いられる英語は「標準英語」として認識されており、読者の皆さんもこの標準英語を学習対象としていると思います。

しかし、英語でコミュニケーションを取る際に耳を澄ませば、そこにはさまざまな「訛り」を聞き取ることができます。日本、中国、フィリピン、シンガポール、インド、さらにオーストラリア、カナダ、イギリス、アメリカの英語などは、おのおのの訛りをもっており、標準英語と同一物ではありません。

では、いったい標準英語とは何なのでしょう。それは具体的に実在する何かというより、抽象的な理想形に近いものだろうと思います。「標準英語」と「英語」を半ば同一視してしまうと、多種多様な英語の姿を見失い、学習や実践の現場において、がっかりしたり失敗したりする機会が増えてしまいかねません。効率的に学習するためにも、英語の実態を理解することが重要です。まずは、標準語の形成に焦点を当て、英語の歴史の概略について見ていきましょう。

英語の歴史の概略

英語の最も古い起源は、紀元前4千年頃に南ロシアのステップ地帯で話されていたとされる「インドヨーロッパ祖語」に求めることができます。インドヨーロッパ祖語は、その後、数千年の時間をかけて分化を繰り返し、ヨーロッパからインドにまたがる広域において現在使用されている多数の言語を派生させました。英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、ギリシャ語はもちろん、アルメニア語、ペルシャ語、ヒンディー語なども、互いに血のつながった親戚ということになります。

これらはいくつかの「語派」に分類されます。英語はドイツ語、オランダ語、北欧諸語などとともに「ゲルマン語派」に属し、それらは、紀元前500年頃までは「ゲルマン祖語」と命名された一つの言語だったと考えられていま

す。それが紀元前5世紀以降に分化を開始し、後の英語に連なる系統も派生してきました。その系統の話者集団は現在の北ドイツ辺りに居住しており、**アングル族**や**サクソン族**などからなっていました。後に前者の名前の母音を変形させて「**イングランド**」や「**イングリッシュ**」という呼称が生まれ、さらに両民族の名前に基づいて「**アングロサクソン**」という呼び名も生まれました。彼らこそが、紀元4～5世紀に「ゲルマン民族の大移動」の一環として海峡を越え、ブリテン島に渡ってくることになる人々でした。そして、そのときに彼らがブリテン島に持ち込んだ言語こそが「英語」だったのです。

📖 英語は、現在のドイツ語やヒンディー語ともつながりがあった

📖 「イングランド」「イングリッシュ」という呼称は、「アングル(族)」に由来している

古英語

5世紀から11世紀までの英語を「古英語」と呼びます。ブリテン島に持ち込まれた英語はアングル方言やサクソン方言などに分かれており、決して一様の言語ではありませんでした。しかし、その後数世紀にわたるキリスト教化や政治的統合などの過程を通じて、8世紀末辺りからアングロサクソン王国としての標準語が、イングランド南西部のウェストサクソン地方の方言を基盤として形成されてきました。

しかし、公的な文書などの読み書きに「ウェストサクソン標準語」が用いられるようになったにすぎず、話し言葉の世界では諸方言がそのまま存続していました。現代でも、公的な書き言葉としての英語は世界中でおおよそ標準的なものが用いられますが、話し言葉としての英語は、話者の出身地などによって多種多様です。まさに現代と似たような状況が、千年以上前の古英語の時代にすでに出来上がっていたのです。

📖 英語の標準語は8世紀末頃に形成され始めた

中英語

ところが、古英語期の言語事情は、1066年の「ノルマン征服」という大事件によってひっくり返されます。これ以

降、1500年までの英語を「**中英語**」と呼びます。フランス、ノルマンディー地方の領主であったウィリアムが、イングランドを征服してしまったのです。以後、**イングランドは、フランス語を母語とするウィリアムや貴族・聖職者らによって支配されることになります**。フランス語支配の時代の始まりです。

今や公的な表舞台の言語はフランス語に取って代われ、英語は庶民の話し言葉という卑しい領域に封じ込められます。英語は大多数のイングランド人の日常語であり続けたものの、英語が書かれる機会はめっきり減り、かつての「ウェストサクソン標準語」もおおよそ忘れ去られ、諸方言の林立する標準語不在の状態へと回帰していったのです。

📖 1066年の「ノルマン征服」により、イングランドではフランス語が公的な言葉となった時期があった

中英語期も後半の14世紀になると、「**英仏百年戦争**」(1337-1453年)などの影響もあり、**イングランド内で英語が復権してきます**。しかし、しばらく表舞台から遠ざけられていたために、標準的な英語の書き方を知っている人などいませんでした。書き方のモデルがない以上、おのおの自らの方言発音に忠実に文字を綴るつづということを実践するよりほかありませんでした。たとえば、この時期の前置詞 **through** のスペリングは、筆者が調べた限り、なんと515通りも存在していました。

しかし、このような統一性のない混乱の中から、やがてロンドン方言を基盤とし、他のさまざまな方言的要素が加味された標準語が芽生えてきました。「ウェストサクソン標準語」に次いで、英語史上、二度目の標準語の萌芽です。しかし、今回の標準語の芽生えも、あくまで書き言葉に関する出来事であり、話し言葉の世界では相変わらず地方ごとに諸方言が用いられていました。

📖 一つの単語に、何通りものスペリングが存在していた

近代英語

1500年から1900年までの「**近代英語**」期は、書き言葉における標準語がゆっくりと発達し、確立していった時代です。書き言葉の標準化の歩みはあくまでゆるやかで、しばらくの間、方言スペリングが林立していた中英語

期の遺産から完全には決別できない時期が続きました。**1600年前後のシェイクスピアですら、異なる5種類のスペリングで自署を残しているほどです**。それでも、17世紀半ばまでには標準語の基礎ができ、さらに**18世紀半ばには現代と比べても遜色のない標準語がほぼ完成するに至ります**。この標準語が、18世紀以降、とりわけ19世紀に頂点を迎えるイギリス帝国の発展とともに世界中にもたらされ、現代へと受け継がれてきたのです。

念を押しておきますが、上述の近代における英語の標準化の流れは、あくまで書き言葉に関するものです。話し言葉については、16世紀辺りからロンドンを中心とする英語がやはり標準化の道を歩み始めますが、日常的には各地において諸方言が用いられ続け、決して一枚岩になることはありませんでした。むしろ、近代以降に世界中に拡散した話し言葉の英語は、土地ごとに独特な訛りをもった「**〇〇英語**」へと方言化していった、とみることもできます。現在、国際・広域コミュニケーションにおいては、話し言葉でも標準的な英語が選ばれる傾向が強いのですが、ローカルな使用においてはむしろ「**脱標準化**」といってもよい流れすら観察されるのです。

英語にはバリエーションがある

以上、英語の「標準化」の歴史を素描してきました。この言語が歴史を通じて豊富なバリエーションを発達させてきた事実がよく見えてきたのではないのでしょうか。私たちが普段の英語学習において前提としている「標準英語」とは、比較的歴史の浅い現象です。それは現在使用されている種々の英語の一つにすぎませんし、**歴史的にも「標準英語」というものが明確に定まっていなかった時代の方がずっと長かったのです**。

